千田北遺跡　木製笠塔婆説明会　資料

令和元年１１月２日（土）　金沢市埋蔵文化財センター

１．調査概要

調査原因　都市計画道路（金沢外環状道路）木越福増線築造工事
調査期間　平成 30 年４月～平成 30 年９月
調 査 地　金沢市千田町地内
調査面積　約 4,300 ㎡

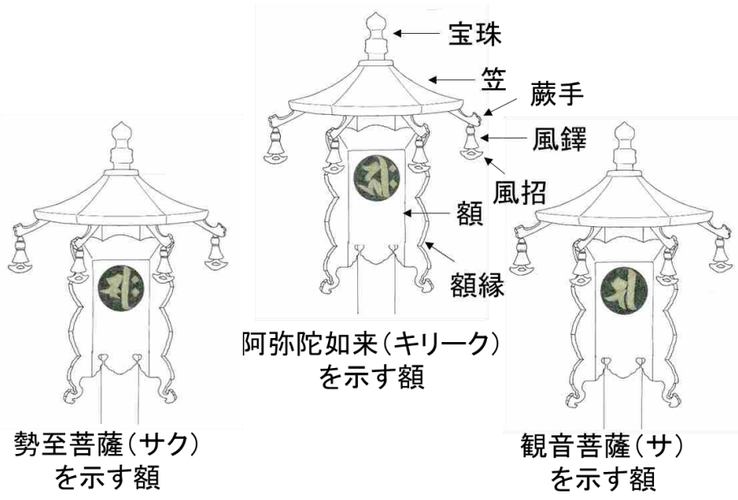
２．出土した木製笠塔婆について（改訂）

木製笠塔婆とは、角柱や板状の塔婆に笠の屋根を乗せたもので、塔身には仏像や種子、名号、願主、年号などが記されます。墓地や街道沿い、人々が集まる空間に建てられていました。

千田北遺跡からは、笠塔婆を構成する部材として、宝珠、笠、蕨手、風鐸、風招、額（額面・額縁）、が出土しており、軸となる竿は見つかっていません。また、周囲を囲んだと考えられる釘貫の部材も出土しています。年代は、共に出土した土器・陶磁器から 13 世紀頃（鎌倉時代頃）と考えられていましたが、年代測定の結果、少なくとも 12 世紀中頃（平安時代末頃）までは遡ることがわかりました。

額は、堀（３区 SD40）から３点出土しました。全て左右どちらか半分ほどが見つかっています。上端及び左右端部は、額縁が斜めに取り付くように仕上げてあり、鉄釘によって額縁と固定しています。下端部は、規則的な花先形の繰形と猪目によって仕上げられており、額縁のデザインと共通しています。それぞれ額面に円相を彫り、内部に阿弥陀如来を示す種子「キリーク」、観音菩薩もしくは勢至菩薩と考えられる種子「サ」もしくは「サク」を薬研彫りしています。円相内には黒色漆を塗布し、文字部には、漆を接着剤として金箔を押しています。

両側の額縁下端部は外側に屈曲し、先端部が蕨手と類似した花先形となります。上縁の表面には、模様の痕跡が浮き上がって残っており、何らかの描画があったようです。また、上縁・側縁ともに、乳白色の彩色痕が見られるため、額面と共に円相内部以外は白色系の顔料が塗布されていました。



千田北遺跡出土笠塔婆の推定復元図

・額面の3種類の種子は、阿弥陀三尊を示していると考えられる。

３．木製笠塔婆の放射性炭素年代測定

発見時は、堀から出土する土器の年代から 13 世紀の建立・廃絶を考えてきましたが、測定結果により 12 世紀中頃までには建立されていた可能性が高まりました。

測定で得られた年代は 11 世紀前半から 12 世紀中頃と長期間ですが、周囲で出土した土器などの年代から 11 世紀代ということは考えにくく、12 世紀前半から中頃に建立され、13 世紀代に廃絶した可能性が高いと考えられます。つまり、鎌倉時代のものとしてきましたが、平安時代の製作の可能性が高まりました。

測定は、金箔の接着剤として用いたと考えられる漆膜を用いて実施しました。漆を採取した年代が測定されるため、採取する箇所によって（外皮に近いか、芯に近いか）年代が異なる木部を測定するよりも製作年代そのものを示すといえます。

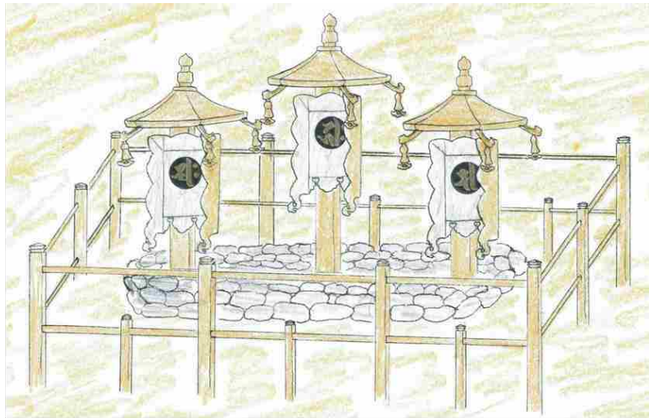
表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-38048-1 遺物No. 1	-29.34±0.25	950±19	950±20	1030-1049 cal AD (18.0%) 1085-1124 cal AD (38.6%) 1137-1150 cal AD (11.6%)	1025-1059 cal AD (25.8%) 1066-1155 cal AD (69.6%)
PLD-38049-1 遺物No. 2	-28.79±0.25	929±19	930±20	1043-1056 cal AD (11.5%) 1076-1106 cal AD (25.6%) 1118-1153 cal AD (31.1%)	1037-1157 cal AD (95.4%)
PLD-38050-1 遺物No. 3	-30.00±0.29	920±21	920±20	1046-1094 cal AD (42.0%) 1120-1141 cal AD (18.0%) 1147-1157 cal AD (8.1%)	1037-1162 cal AD (95.4%)

４．木製笠塔婆出土の意義

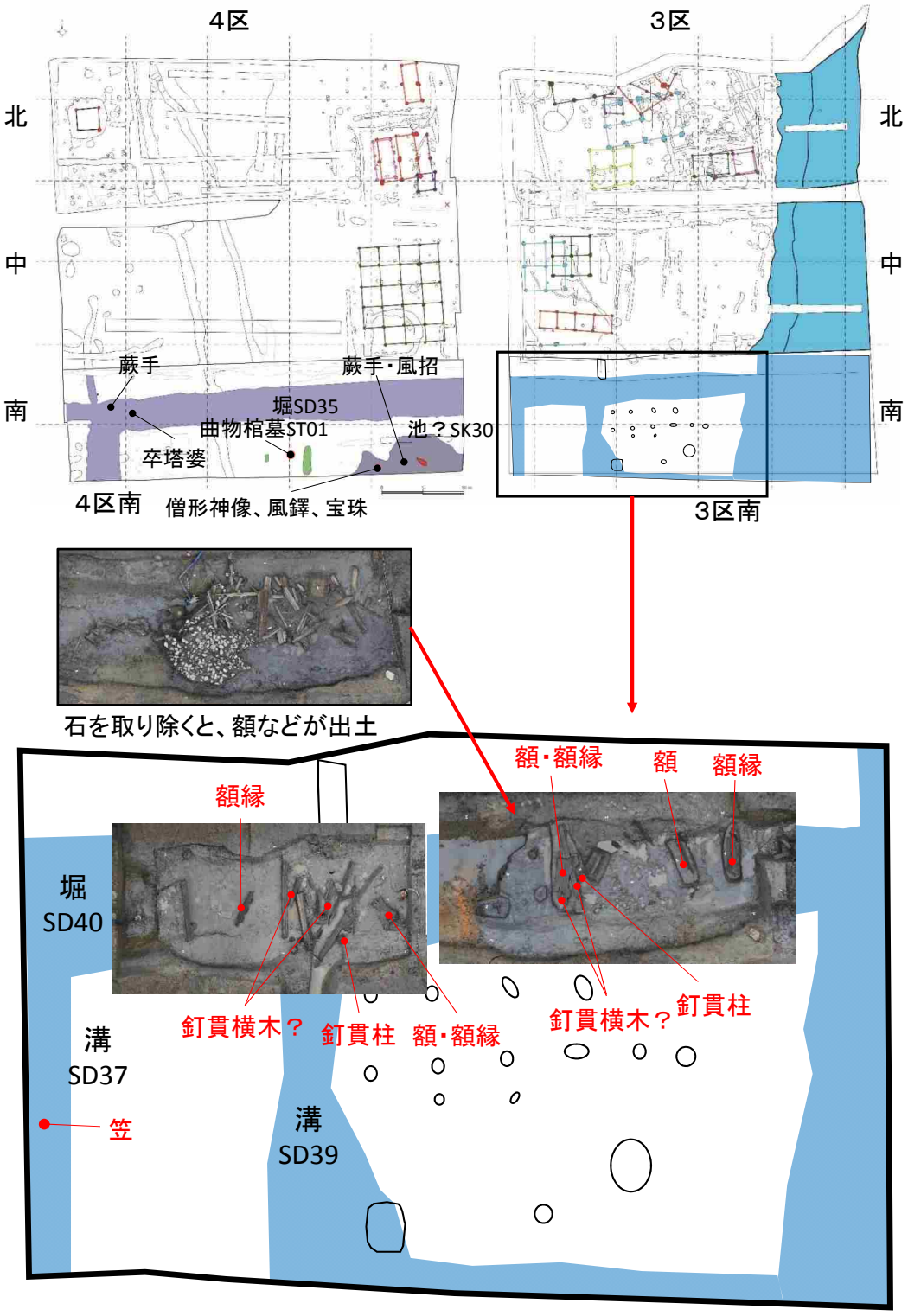
奥州藤原氏初代の藤原清衡が、金色の阿弥陀像を描いた笠塔婆を道筋一町ごとに建立したと鎌倉時代に成立した『吾妻鏡』は伝えています。この記事は平安時代末期の 12 世紀初頭頃のことを伝えており、千田北遺跡の金色の種子をもつ木製笠塔婆は、まさに同時期に近い頃の製品である可能性が高まりました。

このことから、この加賀の地においても、平安時代末期の 12 世紀代には、仏教社会の最新知識であった笠塔婆を取り入れると共に、種子に金箔を用いるという中央の先進的な仏教文化を把握していた在地の有力者がいたと考えられ、文献史料では伺いしれなかった地域の歴史が明らかになったといえます。



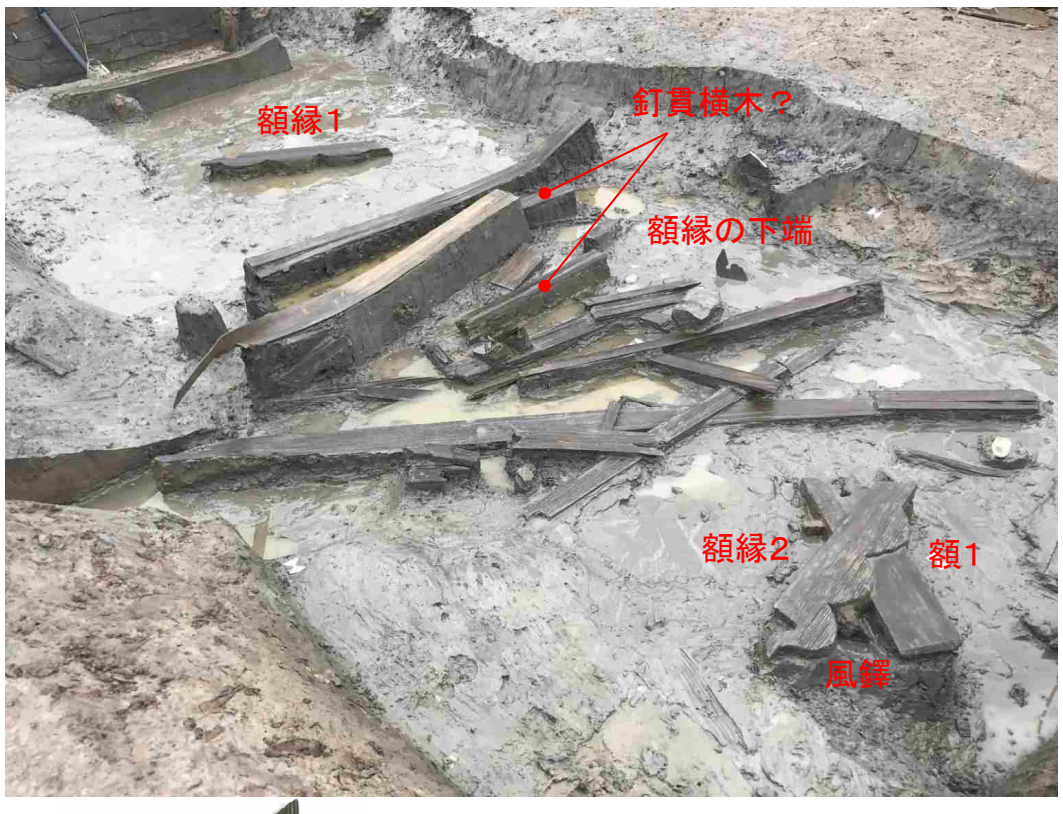
千田北遺跡出土笠塔婆が立つ風景イメージ図

・笠塔婆の笠や蕨手、風鐸、風招、また釘貫柱の頂部付近は、彩色されていた可能性があるが不明なため木肌色とした。
・額面の円相内部は黒色、種子は金箔、円相外部と額縁は乳白色の彩色を想定した。

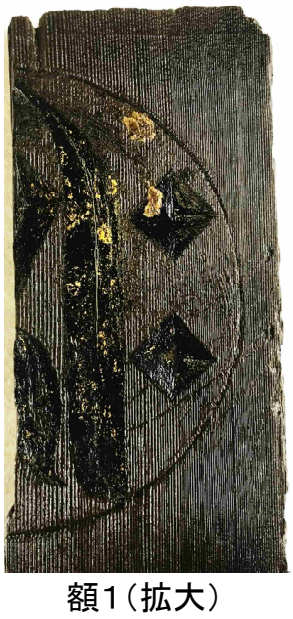


宝珠　笠（上：表面、下：底面）

額と額縁の関係　釘貫の柱



額1　額縁2



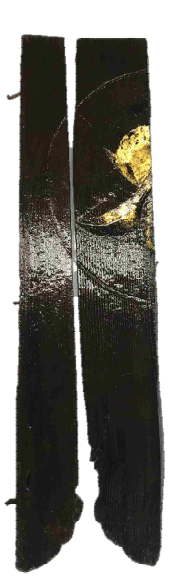
額1（拡大）

円相と阿弥陀如来を示す種子（キリーク）を彫り込み、円相内に黒色漆を塗布し、種子の彫り込み部に金箔を押す

額縁1

風鐸

額縁5・額3
（サorサク）



額2
（サorサク）

額縁3　額縁4

額縁6